

上信沿線の観光を考える

シンポや 事例発表 歴史資源活用を提案

高崎商科大がフォーラム

高崎商科大の地域創造フォーラム（上毛新聞社共催）が2日、高崎市根小屋町の同大で開かれた。世界文化遺産候補「富岡製糸場と絹産業遺産群」が6月のユネスコ世界遺産委員会で登録審議されるのを前に、事例発表やシンポジウム「上信沿線地域の観光まちづくりへの誘いー現状・問題・ビジョン」を通じて、約130人が上信電鉄沿線の観光資源の活用策などを考えた。



上信線沿線の観光などについて意見を交わしたシンポジウム

シンポジウムは、パネリストに同電鉄の笠原道也社長、高崎里山の会の白石隆夫会長、富岡市世界遺産まちづくり部の高橋修部長を迎え、高橋修・同短期大学部現代ビジネス学科長がコーディネーターを務めた。

絹産業遺産群の世界遺産登録を見据え、高崎市から下仁田町まで沿線の観光面での課題を探った。パネリストから絹遺産だけでなく、「駅名に『金井沢の碑（国特別史跡）入り口』と加えるなど沿線の歴史を積極的に紹介していったらどうか」といった提案もあった。

フォーラムは、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に同大が本年度、県内で唯一採択されたのを受け、始動イベントとして開催。市民団体の地域おこし活動などに協力した学生の事例発表もあった。

閉会後には、高崎青年会議所主催の世界遺産応援企画「つなげよう！日本のシルクロード」も行われた。

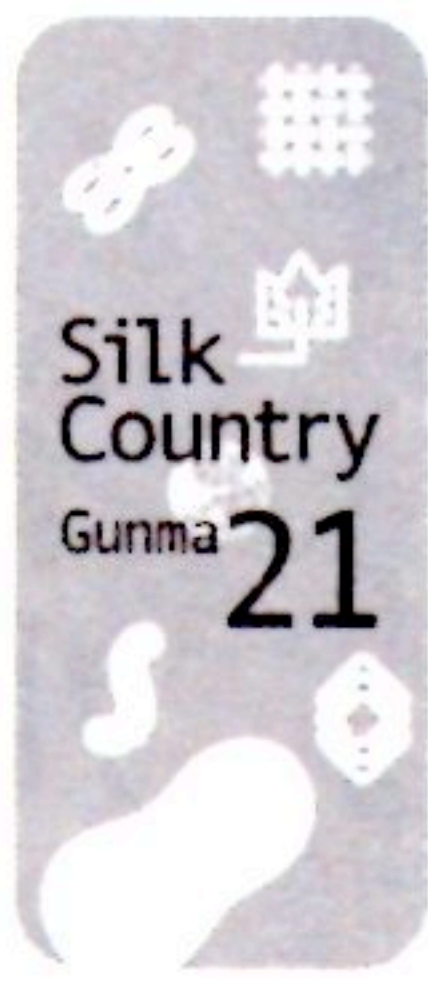
養蚕保護へ桑植樹

前橋 絹製品関係者、農家で



畑に桑の苗木を植え込む関係者

養蚕農家を応援しようと、桑苗の植樹プロジェクトが2日、前橋市小坂子町の糸井文雄さんの畑で行われ、県内



外のデパートや呉服店などの関係者が参加した。純国産絹製品を手掛ける日本蚕糸絹業開発協同組合（小林幸夫理事長）の恒例企画で、参加者は苗木が順調に育つことを願った。

植樹を前に、小林理事長は「県内農家の生き残りのためにも誇るべき純国産の絹製品をしっかりと消費者に届きたい」とあいさつした。

植樹を前に、小林理事長は「県内農家の生き残りのためにも誇るべき純国産の絹製品をしっかりと消費者に届きたい」とあいさつした。

あいにくの雨模様だったため、本格的な植え付け作業は中止。関西や九州などから集まった18社の21人は長靴に履き替え、約300平方メートルの畑で桑の苗木を所に出向き、ビニールハウスなど農業用施設の片付け作業を手伝った。

高崎市のJA職員260人が2日、市内各所に出向き、ビニールハウスなど農業用施設の片付け作業を手伝った。

大雪被害の農家支援

ハウスなど片付ける



高崎市とJA職員

2月中旬の大雪で被害にあった農家を支援しようとして、JAたかさきと高崎市の職員計260人が2日、市内各所に出向き、ビニールハウスなど農業用施設の片付け作業を手伝った。